

# 民族藝術学会 第38回大会

## プログラム／要旨集

会期： 2022年4月16日（土）～17日（日）

主催： 民族藝術学会

会場： Zoomによるオンライン開催

大会テーマ： 「手仕事」と arts/ : 人類の創造的ないとなみを探る

大会事務局： 国際ファッション専門職大学大阪キャンパス内

### プログラム

#### 第1日目 4月16日（土）

11:00	理事会・評議員会	
13:00	開会挨拶 学会長・吉田 憲司 当番校 国際ファッション専門職大学学長・近藤 誠一	
13:15～16:35	<b>シンポジウム</b>	司会：金谷 美和
13:15～13:20	趣旨説明	金谷 美和（文化人類学）
13:20～13:50	報告1 石器づくりという手仕事と人類の進化	門脇 誠二（考古学）
13:50～14:20	報告2 手仕事とジェンダー —「女の手」が意味するもの	中谷 文美（文化人類学）
14:20～14:30	休憩（10分）	
14:30～15:00	報告3 手仕事とつながる森	竹田 晋也（森林科学）
15:00～15:30	報告4 ナショナリズムを紡ぐ： インドにおける手仕事の政治史	豊山 亜希（美術史）
15:30～15:40	休憩（10分）	
15:40～16:00	コメント	田中 雅一（文化人類学）
16:00～16:35	討議	
16:35～16:45	休憩（10分）	
16:45～17:30	総会・第19回木村重信民族藝術学会賞授賞式	

## 第2日目 4月17日(日)

10:00～12:35	<b>一般発表</b>	
10:00～10:35	明治期の外国人音楽教師ルドルフ・ディットリヒの楽譜集における浮世絵—『Nippon Gakufu』(1894; 1895)と『Rakubai』(1894)を中心に—	黒川 真理恵 (音楽)
10:40～11:15	「女馬子」像の創出と変遷に関する一考察:「女馬子唄」はどこから来たのか	海野 るみ (文化人類学)
11:20～11:55	大恐慌期のWLSカントリー系ラジオ番組にあらわれた女性像の分析	三間 美知太郎 (音楽)
12:00～12:35	琉球舞踊の役柄と身体表現におけるジェンダーフリーについて	樋口 美和子 (舞踊)
12:35～13:30	休憩 (55分)	
13:30～16:05	<b>一般発表</b>	
13:30～14:05	北アメリカ北西海岸先住民アートの新たな展開	岸上 伸啓 (民族学)
14:10～14:45	現代スウィック教社会における偶像崇拜論争: 教主の肖像画と表象をめぐる言説と実践	池田 篤史 (美術)
14:50～15:25	村上隆「スーパーフラット三部作」のキュレーションについて—アンディ・ウォーホルの「反復」との相関から—	中谷 裕子 (美術)
15:30～16:05	研究対象としての「おかんアート」——美学、社会学、人類学からの検討	柴田 惇朗 (社会学) 他3名 (藤本・坂本・竹田)
16:05～16:20	休憩 (15分)	
16:20～18:15	<b>一般発表</b>	
16:20～16:55	縄文・弥生・古墳時代における土器の「文様破調」について	石井 匠 (考古)
17:00～17:35	下絵から手わざを見つめる グエン・ファン・チャン《藤を編む》についての一考察	益田 ひかる (芸術学)
17:40～18:15	予祝芸能としての「ひんこ舞」再考 —農人形の分析から—	山中 海溜 (民俗)
18:15～	閉会の挨拶	
18:30～	オンライン懇親会	

### 大会参加に際しての注意事項

- ・参加時は、事前もしくは参加直後に Zoom の表示名を申込時の名前に設定してください。
- ・ハウリングや雑音を防ぐため、発言時以外はマイク：ミュート、カメラ：オフ設定にしてください。
- ・大会事務局からミュート / オフにさせていただくこともありますこと、ご了承ください。
- ・大会事務局は記録のために録音録画をいたしますこと、ご了承ください。
- ・参加者の皆さまによる録音・録画・スクリーンショットはご遠慮ください。
- ・大会プログラムには各発表の実施時間を記しておりますが、発表状況によりましては、実施時間が前後にずれる場合もございますこと、ご了承ください。
- ・ミーティング URL および ID とパスワードは、他者には教えないようにお願いします。
- ・発言（質問）の際は、ミーティング画面下の「参加者」→「手を挙げる」をクリックして挙手ください。司会者に指名を受けた方は、マイクとカメラをオンにしてご発言ください。
- ・チャット機能を使った質問も受け付けます。
- ・Zoom のアプリが最新バージョンでない場合は、通信に不具合が起きる可能性があります。Zoom 時に「アップデート可能」とメッセージが出たら、必ず更新するようにお願いします。

## シンポジウム 13:15 ~ 16:35

シンポジウム

### 「手仕事」と arts/ : 人類の創造的ないとなみを探る

テーマ趣旨：

学会誌の名称として新しくつけられた arts/ は、より広範な人間の創造的な営みをさすのにふさわしい語彙として選ばれました。新名称から 4 年目となり、arts/ を探すアカデミックな試みはまだ端緒についたばかりです。本大会では、この試みを推し進めるテーマとして、「手仕事」を設定します。人類の生存を可能にしたのが道具の獲得であったことを思い起こすと、「手仕事」は、普遍的ないとなみとしての arts/ を考えるキーワードとしてぴったりではないでしょうか。時代や地域によって、「手仕事」を取り巻く状況は変わり、意味も変容しています。「手仕事」は、たんに手でものつくるという実践を意味するだけでなく、分析概念にもなります。さらに、「手仕事」というテーマを置くことによって、芸術からもっとも遠いように見える学問領域における多様な視点を芸術に関連させることができるのではないのでしょうか。

プログラム：

- |      |   |
|------|---|
| 趣旨説明 | 金谷 美和 (文化人類学)                               |
| 報告 1 | 門脇 誠二 (考古学) 「石器づくりという手仕事と人類の進化」             |
| 報告 2 | 中谷 文美 (文化人類学) 「手仕事とジェンダー：「女の手」が意味するもの」      |
| 報告 3 | 竹田 晋也 (森林科学) 「手仕事につながる森」                    |
| 報告 4 | 豊山 亜希 (美術史) 「ナショナリズムを紡ぐ：<br>インドにおける手仕事の政治史」 |
| コメント | 田中 雅一 (文化人類学)                               |

このシンポジウムは科研プロジェクト「布工芸品の継承をめぐる文化人類学的研究——生産者、資源管理、加工技術を中心に」(基盤研究 (B)、研究代表者・金谷美和、課題番号 21H00649) の一環をなすものです。

### 発表要旨 (シンポジウム)

#### 報告 1 門脇 誠二 (考古学)

##### 石器づくりという手仕事と人類の進化

石器を作る行為は、300 万～250 万年前、いわゆる猿人段階の人類がいたころに出現しました。その後、人類の進化と共に石器の形や製作技術が変化しました。この発表では、石器に関わる手仕事が人類にもたらした新しい運動や感覚、思考について紹介します。古代の石器のほとんどは、「作品」として作られていたわけではありません。つまり、石器づくり自体がゴールだったのではありません。そうではなく、石器は、食料を得る行動の過程において、岩石という物質が人の手によって移動や変形されたプロセスとして見るべきであることを説明します。この見方に基づくと、石器の進化は、必ずしも高度で複雑な作り方に一方向的に変化したわけではないことが理解できます。その例として、ネアンデルタール人がいた頃とその後の石器を比較します。

## (シンポジウム)

### 報告2 中谷 文美 (文化人類学)

#### 手仕事とジェンダー

##### —「女の手」が意味するもの

「手仕事」という言葉は、さまざまなイメージを喚起する。ただし、私たち一人ひとりが具体的にどのようなタイプの手仕事を思い浮かべるかによって、連想されるイメージの中身は異なるだろう。とりわけ、その手仕事は「誰の」手によって作られたものであるかが重要な鍵となる。

手仕事にジェンダーを掛け合わせると何が見えるか。とくに「女の手仕事」という言葉が適用される場面として、家庭内で行われてきた手工芸品製作と工場での非熟練労働を連続線上でとらえ、時代や社会の違いにかかわらず女性の労働に対する過小評価が徹底される要因を論じたい。

### 報告3 竹田 晋也 (森林科学)

#### 手仕事につながる森

昨年の秋に天橋立を望む工房で藤績み（フジウミ）をはじめて体験した。藤績みは難しいので手先に集中せざるを得ない。するとやがて波の音も聞こえなくなって、雑念がすべて消えていく三昧の心境が体感できる。講師のSさんの場合、この藤績み作業中に、「フジが森の中にある時のことを感じる」という。この体験とSさんの言葉がきっかけとなって、これまで非木材林産物について調べてきた森を「手仕事」という観点から見直してみたいと思うようになった。手仕事を介して森とつながり、森の多様性を活かすことで森を維持することはできるのだろうか。本報告では、そうした可能性を東南アジア大陸部（タイ、ミャンマー、ラオス）の事例から考えてみたい。

### 報告4 豊山 亜希 (美術史)

#### ナショナリズムを紡ぐ：インドにおける手仕事の政治史

インドの手仕事の代表格として近年日本でも注目を集める手紡ぎ手織り布カーディーは、独立運動においてイギリスへの抵抗のシンボルとして用いられたことで知られる。工業製品の対概念として手仕事を価値づける言説は、19世紀後半にイギリスをはじめ工業化が進展した西欧各国で登場した。この二項対立的な言説は植民地インドにおいては、宗主国イギリスによって衰退を余儀なくされた伝統の復興と関連づけて政治化され、その象徴として価値を付与された布は、これを纏う人々を国民として統合する役割を果たした。こうした手仕事のイデオロギーは文脈を変えつつ、新興経済大国となった現代インドへと継承されている。本発表では、インド近現代史において手仕事の政治性がいかに変遷してきたのかを、カーディーに代表される手工芸品としての布の価値変容を事例に論じる。

## 発表要旨（一般発表）

10:00～10:35 黒川 真理恵（音楽）

明治期の外国人音楽教師ルドルフ・ディットリヒの楽譜集における浮世絵  
— 『Nippon Gakufu』（1894; 1895）と 『Rakubai』（1894）を中心に—

オーストリア出身の音楽家ルドルフ・ディットリヒ Rudolf Dittrich（1861-1919）は、東京音楽学校の外国人教師として1888（明治21）年11月から1894（明治27）年7月まで日本に滞在した。ディットリヒは、日本滞在中に見聞きした音楽や楽譜をもとに日本音楽を編曲し、楽譜集『Nippon Gakufu（日本楽譜）』（第1集1894；第2集1895）と『Rakubai（落梅）』（1894）をライプチヒのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社より出版した。

本発表では、ディットリヒが楽譜集の表紙に用いた浮世絵について明らかにする。『Nippon Gakufu』第1集の表紙は欧文挿絵本のちりめん本の出版で知られる長谷川武次郎の工房が手掛け、第2集は喜多川歌麿の《松葉屋内染之助》（1797）、『Rakubai』は三代目歌川豊国の《今源氏錦絵合 須磨》（1853）を転用したと思われる。

10:40～11:15 海野 るみ（文化人類学）

「女馬子」像の創出と変遷に関する一考察：「女馬子唄」はどこから来たのか

本研究の目的は、「女馬子」（または「女馬士」、以下「女馬子」）が明治・大正期にどのような意味を持つモチーフとして流通したかを明らかにすることにある。筆者は、明治期に作詩作曲され、昭和初期には楽譜やレコードとして流布し、後に唱歌集や歌曲集にも掲載されて親しまれた、「女馬子唄」（黒木耳村詩、田中銀之助曲）についての研究を進めてきた。その過程で、「女馬子」がどのような経緯で詩のモチーフとなったのかに関心を抱くに至った。それは、当初黒木が故郷で作詩したとされたが、帰郷と作詩の時期とにずれがある等、詩の背景が曖昧であったからである。

そこで本発表では、黒木が作詩したと考えられる1910年前後を中心に、当時の黒木の状況を明らかにすると同時に、「女馬子」を扱った歌舞伎や戯曲、小説等の分析を通じて、当時の「女馬子」像を明らかにする。また、黒木作「女馬子唄」の意味する所について、可能性を考察する。

11:20～11:55 三間 美知太郎（音楽）

大恐慌期のWLS カントリー系ラジオ番組にあらわれた女性像の分析

本研究発表は、シカゴのラジオ局WLSのカントリー系ラジオ番組において演出された女性像を考察するものである。

クリスティン・マックスカーによると、WLSのラジオ番組においては、「献身的な母親」という家父長制的な女性像が出演者のパフォーマンスや役作りに投影されていた。その背景には、大恐慌の影響で「男性＝稼ぎ手」「女性＝家庭」という従来の性役割が機能しなくなったリスナーの不安を払しょくする狙いがあったという。

しかしながら、この研究を踏まえてなお留意すべき点は、WLSのターゲット層が主に中西部に住む白人の農民だったことである。マックスカーの想定したリスナーとは、当時、男性の失業が相次ぎ、伝統的な性役割に揺らぎが生じた都市部の労働者階級だった。よって、大恐慌期の中西部農村の女性が置かれた状況を考慮しながら、WLSのカントリー系ラジオ番組における女性像を再検討する必要があると思われる。

## (一般発表)

12:00 ~ 12:35 樋口 美和子 (舞踊)

### 琉球舞踊の役柄と身体表現におけるジェンダーフリーについて

本研究では琉球舞踊実演家の性別の実態を明らかにし、役柄と実演家の性別との関連を調査する。また、琉球舞踊実演家でもある発表者本人及び、他の実演家への聞き取り調査や動作分析を行い、役柄の性別による身体表現技法の違いを整理する。

能や歌舞伎と異なり、琉球舞踊では女性も舞台に出演可能で、戦後以後継承の中心は、むしろ女性中心である。琉球舞踊には、二才踊り（男踊り）や女踊りといった役柄の性別によって演目が分類されるが、実演家に男役、女役の固定はなく、女性・男性実演家のいずれも男役、女役をつとめる。固定された役柄を極めるというよりもむしろ、両方の役柄をきちんと踊りこなせるようになることが求められる。琉球舞踊では女性的な男性実演家や、男性的な女性実演家に対しても寛容な態度が見受けられることから、SDGsにおけるジェンダーフリー実践のモデルケースになり得るのではないだろうか。

13:30 ~ 14:05 岸上 伸啓 (民族学)

### 北アメリカ北西海岸先住民アートの新たな展開

カナダ政府による半世紀以上にわたる同化政策に苦しめられたカナダ太平洋沿岸地域の先住民は、1950年代から伝統文化や言語の復興運動を開始した。北西海岸先住民は、1960年代から媒体として版画を採用したが、それは人気を博し、先住民アートとしての地位を確立した。当初、各集団に伝わるワシやワタリガラスのような紋章を作品に描いたが、20世紀に入ると現代社会の世相を反映するような人気スポーツのホッケーや映画のスターウォーズなどを描いた版画が出現した。また、マイケル・ヤグラナースがハイダ・マンガを制作するとともに、多様な媒体を用いて環境問題や経済格差、人種差別、戦争と平和に関する主張を込めた作品を世に問い始めた。本報告では、アンディ・エヴァーソンらの版画とマイケル・ヤグラナースのアート作品を中心に北西海岸先住民アートにおける表象の対象と方法、形式、内容の変化について紹介し、検討を加える。

14:10 ~ 14:45 池田 篤史 (美術)

### 現代スィック教社会における偶像崇拜論争： 教主の肖像画と表象をめぐる言説と実践

現代のスィック教社会では、創始者グルー・ナーナクを初めとする教主たちの肖像画が寺院や家屋、店先などの壁に掛けられている。しかし、スィック教の教主たちは偶像崇拜を行う者たちを批判していたため、教主の肖像画が偶像崇拜の禁止という教義に抵触するか否かという論争が、スィック教徒たちの間で起きている。この論争は肖像画に留まらず、映画やインターネット上の画像についても範囲が拡大している。そこで本報告では、近代以降のスィック教社会を特徴づける教義と実際の乖離が、スィック教独自の視覚文化の発展を促したことを指摘する。また、この現象が1990年代以降に加速したことに着目し、インターネットやSNSなどの情報技術の革新というグローバルな文脈と、インドの経済開放やスィック・ナショナリズムの終焉といったローカルな文脈の中に位置づけることを、今後の課題として提示する。

## (一般発表)

14:50～15:25 中谷 裕子 (美術)

村上隆「スーパーフラット三部作」のキュレーションについて  
—アンディ・ウォーホルの「反復」との相関から—

現代美術家・村上隆は、国内での評価以上に欧米で高い評価を受け、商業的にも大きな成功を収めている。本発表では、彼自身がキュレーションした展覧会「スーパーフラット三部作」との関係から、その背景を考察する。村上は先行して出版した図録『SUPERFLAT』において、日本のアニメやマンガなど美術史の主流から外れた要素を著名な日本美術作品と併置し、独自に日本美術史を再編しようとした。その構成にはイメージを反復させるアンディ・ウォーホルの影響が見られる。

本発表では、三部作の最後となる「リトルボーイ」展に出品された村上自身の作品《タイムボカン》に特に注目する。この展覧会で村上は、戦後日本のアニメやマンガを原爆投下からの復興を示す表象として提示した。そのことによって村上が、日米の歴史的事象と戦後日本のサブカルチャーを結び付け、ウォーホルの「死」のイメージに新たな意味づけを行ったことを明らかにする。

15:30～16:05 柴田 惇朗 (社会学) 他3名 (藤本流位、坂本唯、竹田優哉)

研究対象としての「おかんアート」——美学、社会学、人類学からの検討

「おかんアート」とは「高齢の婦人」＝おかんがつくる「手芸作品」の総称である(山下2020:28)。本発表ではおかんアート概念の今後の研究の可能性をその社会的特徴に絞って、美学・社会学・人類学の複数ディシプリンの視点から考察するものである。

2000年代に語が誕生する以前からおかんアート(のような)実践は、芸術という制度の外側で再生産され続けてきた。広まるにつれ同概念は一方で製作者をエンパワーメントするものとして、他方で彼女らを制度の埒外に追いやるスティグマとして、両義的に捉えられてきた。現在おかんアートの実践は団体化や展覧会などの開催によって制度化の過渡期にあると考えられる。

本発表の意義は現在蓄積が不十分であるおかんアート研究の分野を複数の人文社会科学の視点を導入することにより、おかんアートという実践がどのように芸術制度、および広く社会と関係しうるのかについて考察が可能になる点である。

[参考文献] 山下香, 2020, 「個人の趣味が生み出すエンパワーメント——高齢の婦人が制作する手芸作品『おかんアート』の事例から」岡原正幸編, 『アート・ライフ・社会学——エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房, 24-45.

16:20～16:55 石井 匠 (考古)

縄文・弥生・古墳時代における土器の「文様破調」について

土器の装飾文様全体を観察すると、土器面を帯状に周回する連続文様の反復リズムが意図的に一か所で崩される「文様破調」が一定数の土器に見られる。たとえば、縄文土器の制作者たちが器面に▲を5つ巡らせる場合、同一文様の反復を拒絶し、[▲▲▽▲▲][▲▲◎▲▲][▲▲▲▲▲]のように一か所だけ反転・置換・削除したりする。器面を周回する横線では、始終を結ばずに切断したり上下にずらして螺旋化したりする例も多い。これらの文様変化は、従来、土器制作者の未熟な技術による偶発的なミスと考えられてきたが、発表者は縄文時代全時期の膨大な事例を通観し、精緻な分析から制作者の意図的な文様破調であることを明らかにしてきた。本発表では、縄文土器だけでなく、未開拓の弥生・古墳時代の土器等における文様破調の事例を紹介する。

## (一般発表)

17:00～17:35 益田 ひかる (芸術学)

下絵から手わざを見つめる グエン・ファン・チャン《籐を編む》についての一考察

ベトナム近代絹絵の創始者といわれるグエン・ファン・チャンの遺族所蔵作品 17 点が、修復されたうえで、三谷文化芸術保護情報発信事業財団に寄託保存されている。その中には、素描作品が 8 点あり、特に精緻に描かれたものが 3 点残されている。絹絵作品との比較により、それらは絹絵の下絵と推察される。本発表では、まだ作家研究や作品研究が乏しいベトナムの絹絵について、その中の《籐を編む》下絵を通して、当時の文化背景や画家の画題選択の意図を考察・検討したい。当時チャン以外に、田舎町の生活感ある女性たちの手仕事に着目した画家はいたのか。下絵と完成作との比較検討を通して、絹絵制作のプロセスを明らかにし、さらにその画題、技法の独自性について考察することで、東南アジア近代美術においても、特異なジャンルとして登場したベトナム近代絹絵の実態の一端を明らかにする。

17:40～18:15 山中 海瑠 (民俗)

予祝芸能としての「ひんここ舞」再考 ―農人形の分析から―

「ひんここ舞」は、岐阜県美濃市の大矢田神社で奉納される人形芸能であり、小山の斜面に幕を張った露天の舞台上で独特のからくり人形舞を披露することで知られている。この人形戯は、古くは永田衡吉 (1969) によって取り上げられて以来、麦の豊作祈願を目的とした予祝的な芸能であると見做されてきた。

しかしながら、農人形の内部構造や形態に注目すると、この人形は農作業の模倣を意図して作られた人形であるとは考えられないことが分かる。そのうえで、文献史料を分析すると、そもそも「ひんここ舞」の人形戯が予祝芸能として始まったものではなく、麦蒔を主題とした演劇でもなかった可能性が浮かびあがる。

本発表は、「ひんここ舞」を農耕的な予祝芸能とみる定説に対して、農人形と文献史料の分析を通して、舞の成立と歴史的変遷における新たな視点を提示するものである。

大会事務局：国際ファッション専門職大学大阪キャンパス内

民族芸術学会第 38 回大会実行委員会

実行委員 金谷 美和 (委員長)、上羽 陽子、竹内 幸絵、濱田 琢司、福内 千絵

民族芸術学会

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5  
大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座内  
TEL 06-6850-5120  
FAX 06-6850-5121